

令和7年度
白神山地世界遺産地域における
原生的ブナ林の長期変動調査
報告書
(概要版)

令和8年3月

東北森林管理局

目 次

1. 調査概要	1
(1) 調査の目的と概要	1
(2) 調査対象地	1
2. 実施内容・調査結果	2
2-1. 積雪深調査	2
A 最深積雪深計	2
(1) 調査方法	2
(2) 調査結果	2
①最深積雪深計の状態	2
②インターバル撮影による積雪深	2
③最深積雪深	3
(3) 考察（最深積雪深の経年推移）	3
2-2. 林内気温調査	3
(1) 調査方法	3
(2) 調査結果	4
①林内気温	4
(3) 考察（年間統計値）	5
2-3. 入り込み利用調査	6
A. 一定期間調査用固定カメラ（センサー撮影）	6
(1) 調査方法	6
(2) 調査結果	6
(3) 考察	7
3. 今後の調査に向けた課題	7

1. 調査概要

(1) 調査の目的と概要

白神山地世界遺産地域管理計画において、「遺産地域の生態系は多種多様な生物種により構成されており、こうした複雑で将来予測が困難な生態系については、順応的管理を行う必要がある。このため、関係行政機関は地元市町村、大学・研究機関、その他の学識経験者などと連携して遺産地域のモニタリングを推進し、適正な管理を行う。」とされている。

このため、東北森林管理局においては、青森県側は平成7年度～9年度、秋田県側は平成8年度～11年度にかけて白神山地世界遺産地域核心地域のブナ林内にそれぞれ固定調査区を選定・設置し、寒冷・多雪な気候下にある世界遺産地域の原生的なブナ林の変動を明らかにするためのモニタリング調査を毎年実施しているところである。

また、近年の地球温暖化等による遺産地域の自然環境への影響については、ほとんど明らかにならず、今後何らかの影響が予想されることから、自然環境の変化等を的確に察知し、遺産地域の順応的管理に資するという観点からも、本調査の必要性が高まってきている。

以上のことから、本調査は、青森県側(平成10年度から継続調査)及び秋田県側(平成12年度から継続調査)の固定調査区等において、ブナ林の森林構造の把握と変動の特性を明らかにすることにより、今後とも世界遺産地域としての価値を維持し、適切な管理・保全に資するための基礎データの収集を行うものである。

(2) 調査対象地

白神山地世界遺産地域及びその周辺部を調査対象とし、図1に示す各地点で調査を実施した。

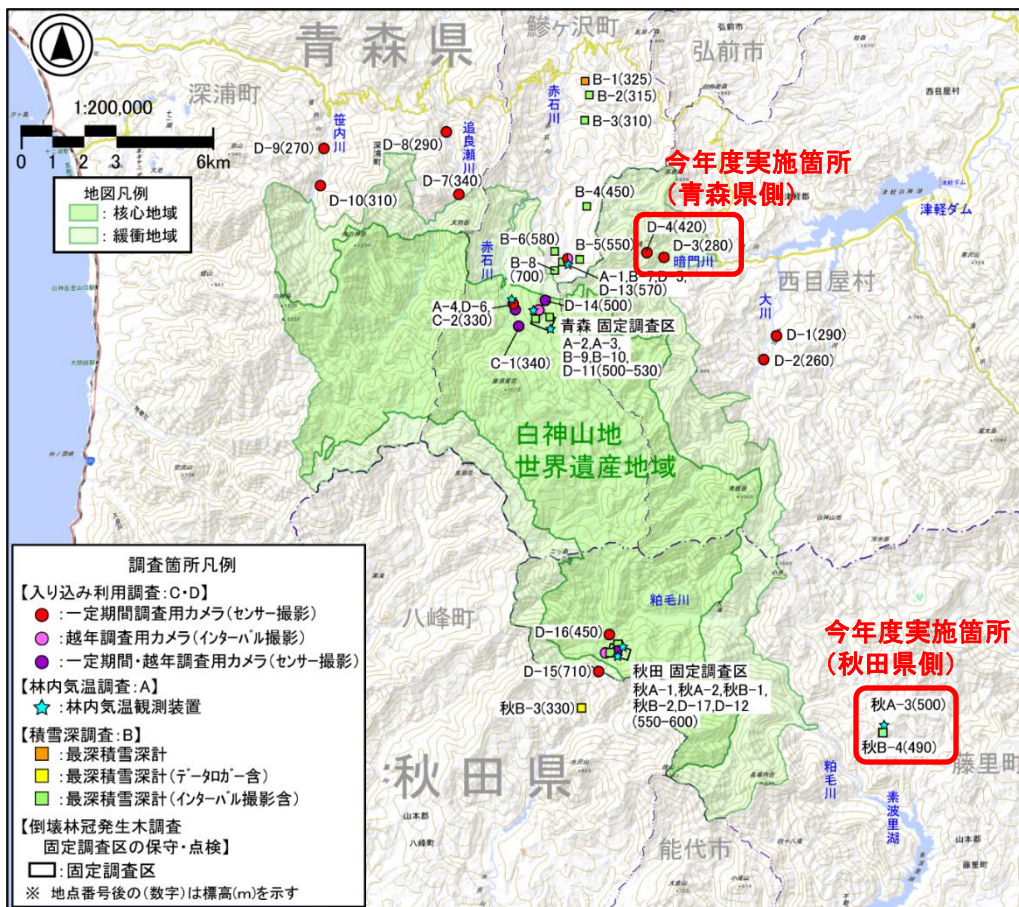


図1 調査対象地位置及び調査地点位置図

2. 実施内容・調査結果

※青森県側は令和4年度、秋田県側は令和5年度の大雨の影響により現地まで到達することが困難な箇所が多数あることから、今年度は以下の項目に限定して調査を実施した(仕様書より)。

※今年度の実施項目は、入り込み利用調査2箇所(D-3、D-4)、積雪深調査1箇所(秋B-4)、林内気温調査1箇所(秋A-3)のみである。

2-1. 積雪深調査

A 最深積雪深計

(1) 調査方法

- ▶秋田県側 1 箇所に設置されている最深積雪深計等により令和 6 年度冬季の最深積雪深を測定した。
- ▶最深積雪深の計測時に積雪深計の状態を点検した。
- ▶秋田県側 1 地点(秋B-4)においては、令和 6 年度秋季に設置された自動撮影カメラ(インターバル撮影)の画像から積雪深を読み取り、最深積雪深計の結果との比較検討により計測した(写真 1)。
- ▶インターバル撮影画像からの積雪深計測は、赤と白に塗り分けられた最深積雪深計(秋B-4)を計測指標とした(写真 2)。
- ▶令和 7 年度冬季の積雪深計測のため、秋に自動撮影カメラを再設置した(表 1)。

表 1 積雪深調査用自動撮影カメラの設置・回収状況

箇所番号	地域	設置日 (R6 年)	回収日 (R7 年)	再設置日 (R7 年)
秋 B-4	粕毛林道	10 月 28 日	7 月 30 日	10 月 29 日



写真 1 インターバル撮影による最深積雪深の計測
(左: 最深積雪深計、右: 自動撮影カメラの設置状況)

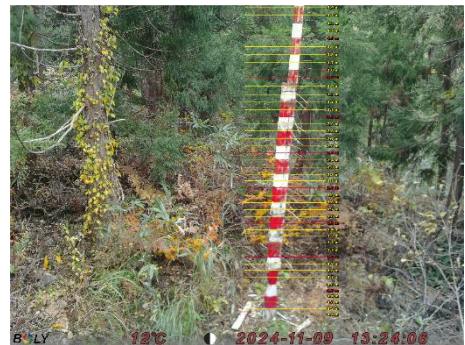


写真 2 インターバル撮影による積雪深の計測指標(赤白塗色の最深積雪深計)

(2) 調査結果

①最深積雪深計の状態

- ▶秋B-4 の支柱は従来より若干傾いていたが、傾きがより大きくなっていった。これは、以前にクマにより齧られた被害によるものではなく、支柱の地下部や横木の老朽化によるものと考えられる。応急処置を行い修正したが、今後さらに支柱の劣化が進行し、倒壊する可能性が高い。現在の最深積雪深計に変わる計測指標の検討が必要である。

②インターバル撮影による積雪深

- ▶バンドが切れてカメラが落下していたが、既に積雪深はピークを過ぎており、最深積雪深の把握に支障はなかった。秋B-4 では 2 月 23 日から 24 日にかけて積雪深が最大値の 3.7m となった(図 2)。

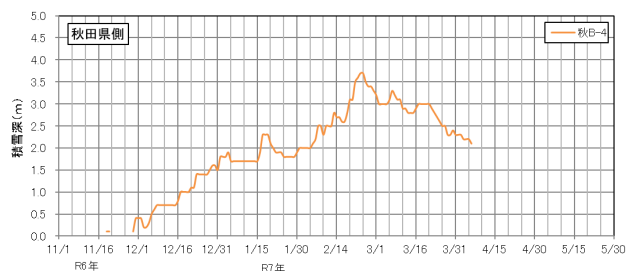


図2 インターバル撮影画像による積雪深の推移

③最深積雪深

▶表 2 に最深積雪深計による計測結果と、自動撮影カメラによる計測結果の比較を示す。秋B-4において、両者による最深積雪深の差は約 0.15m (4.5%)となった。

▶昨年度同様、両手法の計測結果はいずれも概ね近似した。

▶令和 6 年度冬季の秋B-4 の最深積雪深は 3.7m で、令和 5 年度より 2.3m 多かった(図 3)。平成 13 年度から令和 5 年度の平均値と令和 6 年度の値を比較すると、過年度平均より 1.1m 多かった。

▶令和元年度冬季に過去最小の値となった後、令和 2～3 年度は増加傾向となり、令和 5 年度は大幅に減少して過去 2 番目に少ない値となったが、令和 6 年度は大きく増加して過去最大の値となった。

表2 最深積雪深計とインターバル撮影画像から計測した最深積雪深の比較

箇所番号	最深積雪(m)		差分	
	最深積雪深計	インターバル撮影	(m)	(%)
秋 B-4	3.85	3.7	0.15	4.5

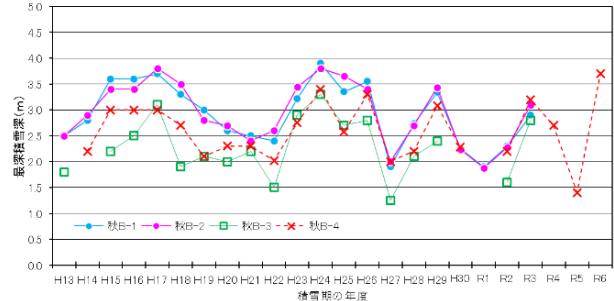


図3 最深積雪深の経年変化の比較

(3) 考察（最深積雪深の経年推移）

最深積雪深は数年周期で増減を繰り返してきているように見える。ただし、平成 30 年度冬季から令和 2 年度冬季にかけては最深積雪深計の最低部の針金が曲がらず欠測が生じた箇所も多く、調査期間全体の中でも特に少雪傾向の冬が続いた。令和 5 年度は過去 2 番目に少なくなり、白神山地においては長期的に見て積雪深が減少傾向にあると考えられる。しかし、令和 6 年度には過去最大の積雪深となった。近年はこれまでにない大幅な少雪となる年がある一方で、過去最大の積雪深を記録する年があるなど、降雪の傾向が短期的に変化し、極端化しているようにも見える。

2-2. 林内気温調査

(1) 調査方法

▶固定調査区等の林内の立木には、過年度調査から継続的に林内気温観測装置を高さ 4m ほどに設置した(表 3、写真 3)。各観測機器から昨年度調査以降の観測データを回収するとともに、電池交換及び観測機器やシェルター(格納容器)の状況を確認した(表 4)。

▶年平均気温や真冬日日数、暖かさの指数等の 10 項目の年間統計値を算出し、平成 18 年度からの経年的な解析を行い、結果について考察した。

表3 林内気温観測装置の仕様と設定

製品名・型番	株式会社ティアンドディ おんどり Jr・TR-51i
計測温度範囲	-40～80℃(測定・表示分解能 0.1℃)
バッテリー寿命	約 4 年
設定(測定)	1 時間間隔



写真3 林内気温調査状況
(左:データ回収状況、右:設置状況)

表4 回収した林内気温計データの観測期日等

地点	番号	記録開始日時 (から)	回収1回目 (まで)	回収2回目 (まで)	備考
粕毛林道	秋A-3	R6年10月28日 14時00分00秒	R7年7月30日 14時00分00秒	R7年10月29日 13時00分00秒	

(2) 調査結果

① 林内気温

- ▶ 令和6年11月～令和7年10月までの秋A-3の林内気温の月平均気温について、全般的に高温傾向であり、4月、5月及び12月以外の月で平年を上回った。特に初夏から夏にかけての気温が高く、7月は22.4℃と平年より2.5℃上回り過去最高値を記録した。6月も過去最高値ではないが、平年を1.2℃上回った。積雪期については、1月が-2.5℃と平年を1.7℃上回り、過去2番目に高い値であった。2～4月にかけては平年と同程度あったが、5月は平年を0.7℃下回った。近傍の気象台の観測地点との比較では、年間を通じて約2～5℃程度低い気温を示した(図4)。
- ▶ 月最高気温は過年度と比較すると、夏が高温傾向となり、7月に過去最高値を記録し、30.8℃で平年より4℃上回る高い値となった。一方で4～5月にかけては1.3～1.5℃平年を下回った。近傍の気象台の観測地点との比較では、年間を通じて約1～9℃程度低い気温を示した。月最低気温は過年度と比較すると、冬と夏に高温傾向となり、1月と9月に過去最高値を記録した。1月は-8.4℃、9月は10.2℃で、それぞれ平年より2.5℃上回った。一方で、10月は0.2℃と平年を1.1℃下回り過去最低値となった。近傍の気象台の観測地点との比較では、年間を通じて約1～5℃程度低いか同等の気温を示した。
- ▶ 降雪・積雪に影響の大きい12～3月については、令和6年度積雪期の気温が高温傾向ではあるが、極端な高温となった前年度ほどではなかった。
- ▶ また夏季についても高温傾向であり、特に7月が高温であった。

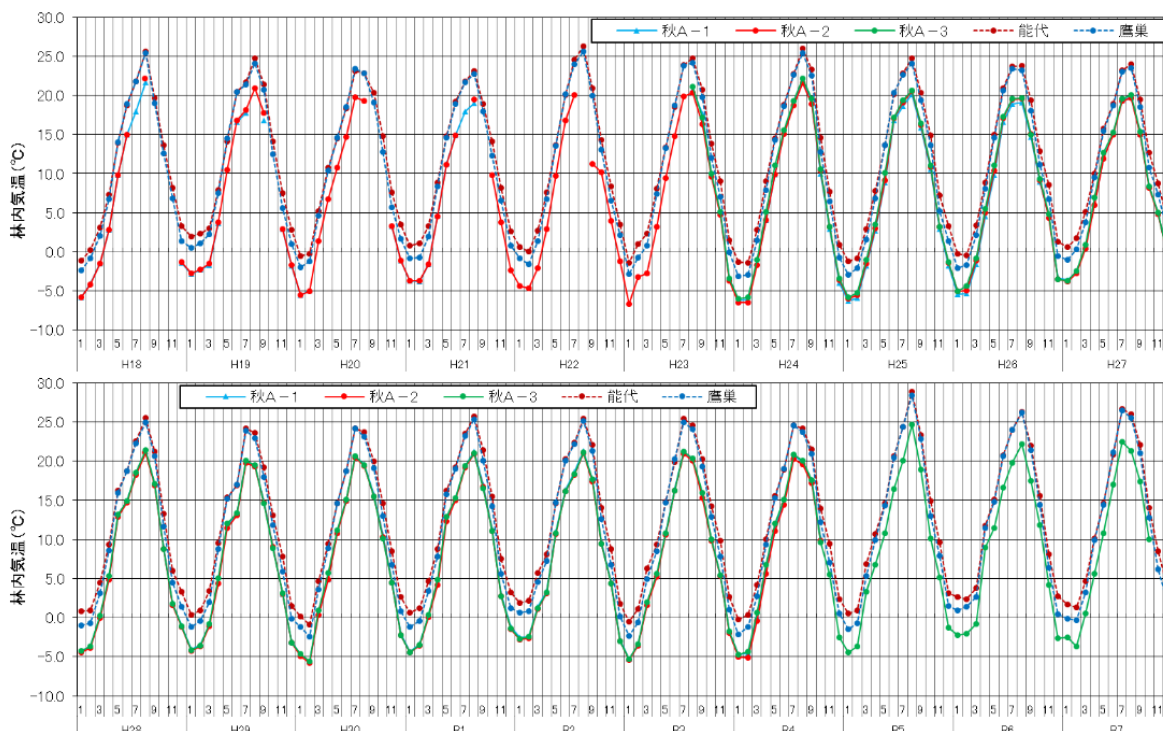


図4 秋田県側のH18年1月～R7年10月の月平均気温(能代、鷹巣の気温は、アメダス観測値)

(3) 考察 (年間統計値)

- ▶年間統計値として、年平均気温、年最高気温、年最低気温、真冬日、冬日、真夏日、夏日の日数を求めた。ブナ林と気温の関係を解析するために、年積算気温、暖かさの指数及び寒さの指数を算出した。
- ▶年平均気温は、6.7~8.9℃の間を推移しており、令和5年には大きく上昇し、令和7年においても気温の高い状態が継続している。(図5)。調査期間を通じては、近年が顕著に高くなっている傾向に見えることから、今後の推移に注視が必要である。
- ▶真夏日は、令和元年以降に真夏日が記録されるようになってきており、令和5年には秋A-3で5日と急増し、令和7年には3日記録されている(図6)。夏季の気温が上昇傾向にある可能性が考えられる。
- ▶真冬日が最も多かったのが平成24年で、秋田県側で93~99日あった(図7)。令和3年には45~48日で最も真冬日が少なくなった。令和4年からは令和5年にかけて増加傾向が継続したが、令和6年の秋A-3では55日と過去2番目に少なくなった。令和7年度には66日に増加している。調査期間を通じては、真冬日が減少傾向にあるように見え、強い冷え込みが減っている可能性が考えられる。
- ▶寒さの指数は暖かさの指数とは逆に5℃以下の温度を積算したもので、温暖地の植生に関係がある。秋田県側では-26~-41である(図8)。調査期間を通じて、いずれの地点においても、平成24年に最小値(寒さが強い)を取って以降、上昇傾向(寒さが和らぐ)にある。秋季から春季にかけての気温が上昇していることに起因すると考えられる。
- ▶年平均気温は令和6年に続いて令和7年も過去と比べて顕著な高温傾向が継続しており、寒さの指数は上昇傾向(寒さが和らぐ)にあることから、冬季の冷え込みが弱まりつつある可能性が示唆され、これが近年の少雪傾向の一因とも推測される。
- ▶令和4年までは年最高気温や年積算気温、暖かさの指数から気温上昇の傾向が示唆されていたが、令和5年は顕著に上昇して過去最高値を記録した。令和6、7年も同様に高温傾向が継続したが、令和7年では令和6年よりも年最高気温が高い値を記録した。

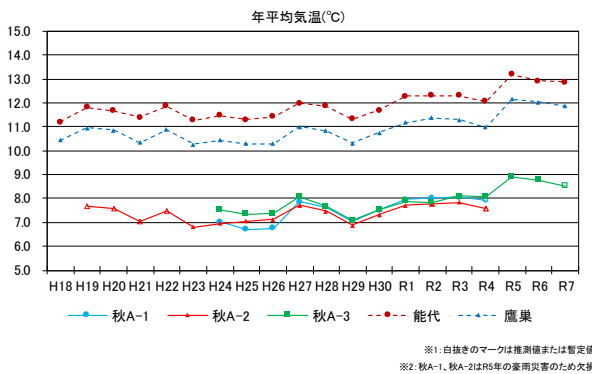


図5 年平均気温の経年変化(秋田県側)

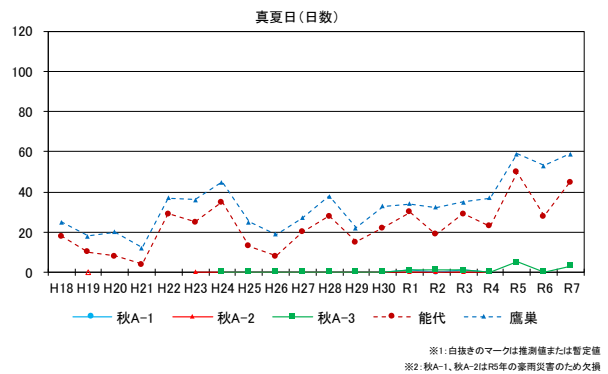


図6 真夏日の経年変化(秋田県側)

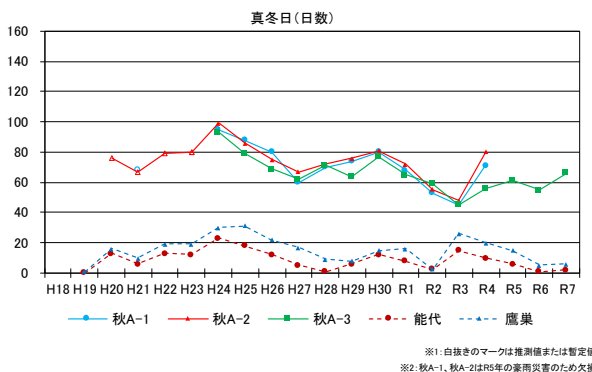


図7 真冬日の経年変化(秋田県側)

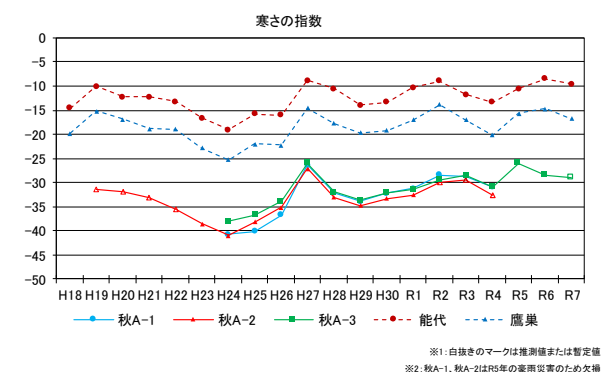


図8 寒さの指数の経年変化(秋田県側)

2-3. 入り込み利用調査

A. 一定期間調査用固定カメラ（センサー撮影）

(1) 調査方法

- ▶調査対象地の主に溪流沿いにセンサーカメラ(トレル 18J-D)を設置し、当該箇所への人の入り込み状況を把握した。設置箇所は、青森県側の2箇所(図1、表5)である。
- ▶令和7年7月31日にセンサーカメラを設置し、10月30日に回収した。
- ▶回収できたカメラの設置期間は91日間である。D-4については、8月12日の撮影を最後にそれ以降は撮影されていなかった。手動撮影は可能であったため、赤外線センサーに何らかの不調が生じたものと考えられる。従って、カメラの設置期間は91日間であったが、D-4の稼働日数は12日間となる。
- ▶入り込み状況の人数の計数は、同一人物は1日1回のみのカウントとし、往復で確認された場合は1回のみとした。

表5 センサーカメラの設置箇所

地域	箇所番号	設置箇所の特徴
暗門川	D-3	暗門川、横倉沢
	D-4	暗門川、第一滝上流溪流

黒字:H23年度から実施地点

(2) 調査結果

- ▶今回調査の全地点の利用者総数は40人であった。登山が最も多く23人で57.5%を占めた。次いで、調査10人、巡視7人であった。
- ▶月別では、7月の稼働日数は1日のみと短い。登山は8月に多く、9月と10月は少なかった。山菜採りは確認されず、巡視と調査が8月と9月に見られた。
- ▶本年度の調査結果について、平成23年度～令和6年度と比較を行った(図10)。調査年度や各カメラによって設置期間が異なるため、撮影された人数を設置日数で割り、1日当たりの利用者数を比較した。
- ▶令和5年度の豪雨被害の影響により、調査は暗門川のD-3とD-4の2地点のみの実施である。近年の全体的な傾向は把握できないが、暗門川のD-3については豪雨被害のあった令和4年度の約0.15人/日を底として、令和6年度は約0.20人/日、本年度は約0.43人/日となっており、利用者数が回復傾向にある可能性も考えられる。

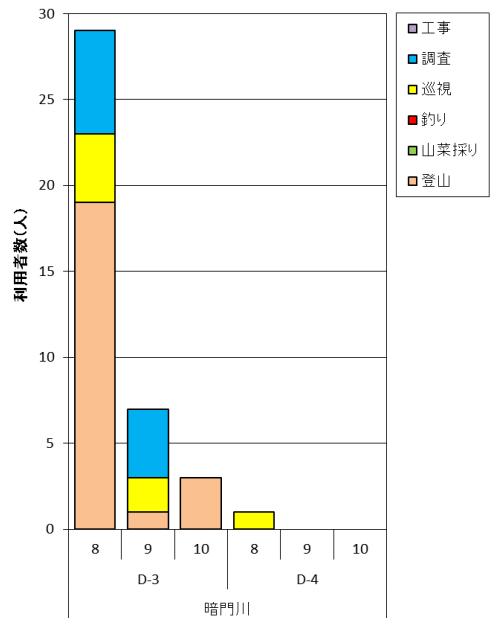


図9 地点ごとの月別利用状況

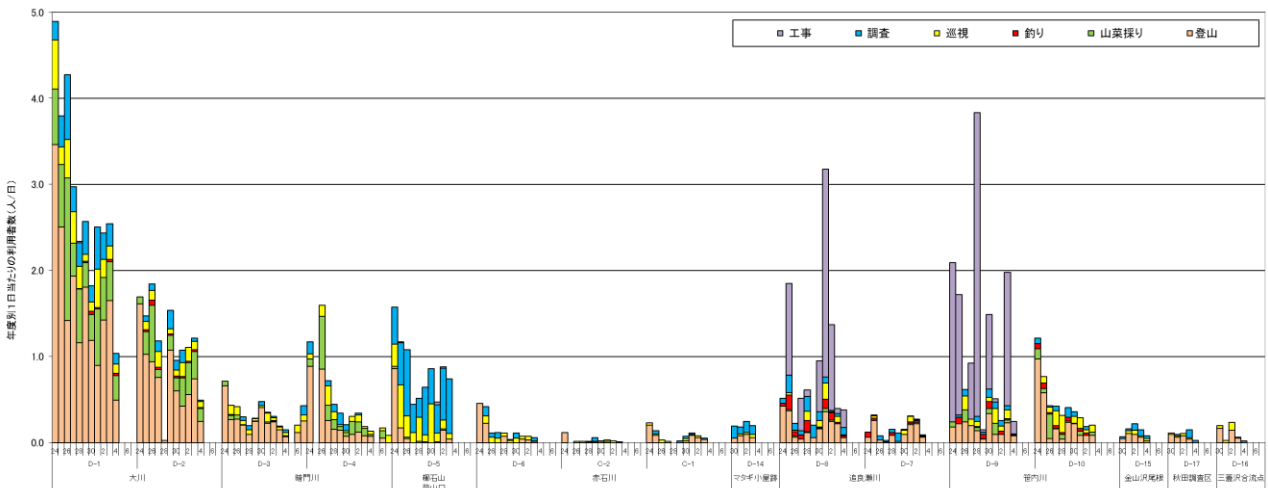


図10 過年度との利用者数の比較

- ▶利用者とともに自動撮影カメラでは哺乳類も撮影された(図 11)。
- ▶不明種を除き、ニホンザルの 1 種のみ哺乳類が確認された。本年度は、調査地点が暗門川の 2 箇所のみであったこともあり、確認種数、撮影頭数ともに少なかった。

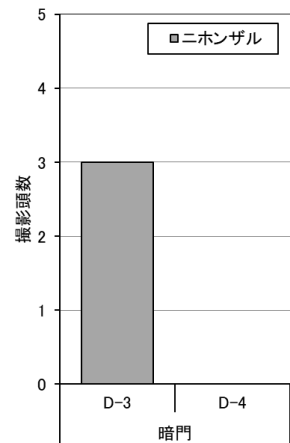


図11 入り込み利用調査で撮影された哺乳類

(3) 考察

- ▶入り込み利用調査は令和 4 年度以降、豪雨等の自然災害の影響により従来の調査地点で実施できておらず、データの継続性が途切れた状態にある。令和 4 年度調査においては一部のカメラと撮影データを回収できていないが、豪雨によりアクセス道路の多くが通行不能となったために利用者数の減少が顕著であった。令和 5 年度は全地点で調査が行われず、令和 6 年度及び本年度も暗門川の 2 箇所の実施であった。暗門川では令和 4 年度より利用者数が回復傾向にあるように考えられたものの、残りの地点についてはアクセス道路が使用不能な現状を踏まえると、復旧工事の関係者を除いて利用者はごくわずかと推測される。
- ▶平成 24 年の入り込み利用調査の開始以降、多くの地点で利用者は減少傾向にあるが、令和 4、5 年度の自然災害によるアクセス道路の通行不能等の影響が長引いた場合、今後も利用者数は低水準で推移する可能性がある。特に登山者は以前から減少傾向が顕著であったが、今後も一般者の利用が難しい状況が続くことも考えられる。青森県側では世界遺産地域内も指定ルート等を通行可能としているが、多くのルートが不明瞭かつ迷いやすい状況となっており、利用者のさらなる減少がルートの藪化と不明瞭化を助長する可能性が考えられる。

3. 今後の調査に向けた課題

- ▶令和 4 年度業務では、豪雨による林道崩壊等の影響により青森県側の調査項目の多くが中止となった。一昨年度(令和 5 年度)業務においては青森県側の調査は行わず秋田県側のみ実施する計画であったが、秋田県側の豪雨被害のため実施できたのは粕毛林道方面の林内気温調査 1 地点(秋 A-3)と最深積雪深調査 1 地点(秋 B-4)のみであった。昨年度(令和 6 年度)は一昨年度の内容に加えて暗門川の入り込み利用調査 2 地点(D-3、D-4)も実施した。本年度も昨年度同様の内容であり、それ以外の大半の項目は未だ調査を再開できていない。
- ▶来年度(令和 8 年度)以降の業務では、調査中止のため回収できていない機材やデータの回収と解析を行うとともに、改めて現地状況を確認した上で適切な調査方法を検討するなど(例: B-7 のインターバル撮影の計測指標、D-16 のカメラ設置箇所)、調査全体のモニタリング体制を立て直す必要がある。
- ▶ブナ林の長期的な変動や気候変動を把握するためには、調査精度を維持・管理しながら、毎年データを収集・累積していくことが重要である。このためには調査方法の標準化や定量的把握により、調査年度ごとの調査精度に差が生じないように留意することが必要となる。
- ▶短期的、長期的視点から調査方法、調査結果の解析内容等の提案を表 6 に示す(個別の調査項目の課題については、令和 7 年度に実施した項目がわずかであることから、令和 4~7 年度報告書の記載内容と同様となっている)。

表6 調査精度を維持、向上するための検討課題

調査項目	検討項目	検討内容の概要
倒壊林冠木発生調査	倒壊林冠木発生状況の推移	★曖昧な記録は僅かになっている。現地調査を行う前に過年度記録を照合し、曖昧なものなどは再確認しておく。
	樹冠投影図の加筆・修正	★樹冠投影図のGISデータについて、新規の樹木を追加するほか、樹木の位置等には現地と大きくずれたものがあるため、必要に応じて修正を行う必要がある。
	倒壊林冠木の定義	★令和元年度より定義に「消失」が加えられていたが、令和3年度以降は仕様書に従い「消失」は採用せず従前の「消滅」として取り扱っている。今後、混乱が生じないように、同様の定義で調査を継続する。
	低木性樹種	★2m以上の低木性樹種には、3～4m以上で番号のついていないものもあり、確実に追加していくことが重要である。 ★令和3年度は、効率性の観点から4m以上の低木性樹種を新規追加とした。今後の取り決めについて、検討が必要である。
	株立個体	★同株の各幹の識別のために、ナンバーテープを付けている。巻き込み等で読めないもの、切れたりなくなった場合は、追加設置することが望ましい。
	立木番号	★年度ごとの追加ではプレート番号が様々になり確認作業が混乱する。連番でプレートを用意し、追加個体にはこれを順番に使用する。 ★既存個体のプレート交換の際、新規プレートを使用すると新たな立木番号となる。番号を踏襲できるように検討する必要がある。
	毎木調査	★倒壊林冠木発生調査では概ね5年ごとに毎木調査(直径、樹高)を実施することとなっている。前回実施は青森県側・秋田県側ともに令和2年度であることから次回を令和7年度以降に検討する。 ★ただし毎木調査は通常の倒壊林冠木発生調査と比して調査労力の増加が多いため、豪雨災害で中断している調査の立て直しを優先して、実施時期を調整することも検討する。
最深積雪深調査	最深積雪深計	★多くの観測柱は腐朽やツキノワグマによる被害により老朽化が激しく、倒壊の危険がある。簡易補修の限界であり、今後も継続する場合、本格的な建て替えが必要な状況である。 ★積雪深計測手法について最深積雪深計と自動撮影カメラによるインターバル撮影による手法とを比較検討した結果、今後は後者へと移行させる方針とする。 ★最深積雪深計が健全の地点については、今後も最深積雪深計による計測を継続し、参考値として記録することを検討する。 ★倒壊した最深積雪深計について、次年度業務での撤去・回収作業の有無や回収方法について方針を検討する。
	インターバル撮影	★従来の観測柱への着色は20cm間隔であるのに対し、本年度開始したスケールの写し込みによる手法は、20cm間隔の色分けに加え、1cm間隔の目盛りが入っている。次年度、撮影画像を確認しながら今後の計測精度を検討し、同スケールに揃える必要がある。 ★B-7は計測指標として最深積雪深計を用いていたが倒壊した。近傍で新たな撮影対象木(基準木)とカメラ設置木を検討する。 ★B-8はカメラが積雪に埋没して最深積雪時の画像を得ることができなかった。計測地点を大きく変更することも選択肢に入れた上で新たな設置位置を検討する。その結果次第では、B-8を調査地点から除外することも検討する。 ☆秋B-4の計測指標としている最深積雪深計が老朽化により傾いてきているため、これに代わる計測指標を検討する。

調査項目	検討項目	検討内容の概要
林内気温調査	現地観測	<ul style="list-style-type: none"> ★シェルターが劣化したものは適宜更新する必要がある。 ★令和4年度にロガーの電池交換を行ったが、A-4は実施できていないため、令和8年度に実施する。
	測定データの整理、真正化	<ul style="list-style-type: none"> ★異常値の原因を明らかにするために、データ回収や点検時の異常について、記録を残すことが必要である。 ★観測地周辺の林冠の変化等で林内気温変化が生じた場合を考慮し、点検時に周辺林冠の状況を写真等で記録しておく。
	観測値の整理・解析	<ul style="list-style-type: none"> ★令和元年度までは平成23年度以降のデータを整理・解析していたが、令和2年度よりは平成18年～22年度の5年分の観測値も整理して解析に加え、各種年間統計値を算出している。しかし平成22年度以前のデータは欠測や異常値があることから信頼性の高い解析には不十分であった。今後も継続して林内気温の変動を解析・把握解析するにはデータの異常や欠測がないことが重要な前提となる。 ★令和4年度は全7地点について2回目のデータ回収が中止となった。また、1回目の回収のうちA-2～A-3の3地点については、PCへのデータ移動中にデータが破損して令和3年11月～令和4年6月までのデータを解析できていない。令和8年度業務では、同期間のデータがデータロガー内に残っているか確認する必要がある。
入り込み利用調査	一定期間調査 入り込み利用調査	<ul style="list-style-type: none"> ★カメラの設置地点について、工事や河川の流路の変化で利用者の移動ルートが変化することがある。過年度の設置位置を考慮しながらも、現地の状況に合わせて調整することが必要である。 ★カメラの防水パッキンの劣化等によって、カメラの不調が起りやすくなっており、カメラの個体識別を行い、不調なカメラを交換していくことが望ましい。 ☆カメラ故障によるデータ欠損を最小限に抑えるため、カメラ点検を必須作業とすることを検討する。
	越年調査 (センサー)	<ul style="list-style-type: none"> ★令和3年度冬季の撮影では、積雪への埋没のためD-14、D-17で非稼働期間が生じた。D-17は地上高2.8mに設置されていたが想定より積雪が多かった。次年度以降はさらに高い位置に設置することも含めて検討する必要がある。
	越年調査 (インターバル)	<ul style="list-style-type: none"> ★積雪深の推定については、最深積雪深計に代わりインターバル撮影による記録を開始したため、越年調査用カメラによる兼用を終了することを検討してもよい。 ★積雪深の把握を継続する場合は、画像からの計測効率を上げるため、最深積雪深用カメラ調査と同様に、カメラの稼働時にスケールを写し込むことが好ましい。 ★ブナのフェノロジー把握については、基準木が設定されていないことや画角が最適ではない。調査精度を上げるためには、撮影対象やカメラの設置位置について検討の余地がある。 ★フェノロジー等の判定基準について、環境条件の樹木生育への影響が顕在化する状況を反映するため、再定義することなども検討する。
固定調査区の点検・保守	杭・プレート	<ul style="list-style-type: none"> ★青森県側では令和4～7年度の4ヶ年、秋田県側では令和5～7年度の3ヶ年について倒壊林冠木発生調査を実施していないため、調査区の杭や樹木の個体識別用ナンバープレートの保守ができていない。杭やナンバープレートの折損や流失が生じたまま放置され、データの継続性や調査効率が低下することが危惧される。 ★次回の調査実施の際には交換・保守用の資材を十分に用意し、杭やナンバープレートの交換等の対応を取る必要がある。特に秋田県側では例年、杭の折損が多いため資材量や作業量増加に留意する。

★:過年度からの継続検討事項、☆:令和7年度追加、変更した検討事項

令和7年度
白神山地世界遺産地域における
原生的ブナ林の長期変動調査
報告書
(概要版)

令和8年3月

発注者：東北森林管理局
〒010-8550 秋田県秋田市中通5丁目9番16号
Tel:018-836-2489

受託者：株式会社グリーンシグマ
〒950-2042 新潟県新潟市西区坂井700番地1
Tel:025-211-0010(代表)